スイスアルプス登攀

スイスアルプスへ登るのは長年の夢だった。それが今年どうにか実現してしまった。

きっかけは昨夏。スイスでアイガー北壁の初登攀者である登山家の加藤滝男氏と出会ったことから話がすすみ、今春、氏のガイドで実行ということになったのである。

遠い話が一挙に現実化して私の日常生活は少しばかり緊張するに至る。体を鍛えなければならない。日本とヨーロッパでは山の登り方に違いがあるという。日本では景色をみながらとくに中高年はゆっくり登る。休憩も多く、お茶や食事の時間もたっぷりとる。ヨーロッパではとても速く歩く。二時間以内には休憩はとらない。体力勝負である。日本は遊山的で向こうはスポーツとでもいうべきか。

またヨーロッパアルプスは日本の山より大体 1,000 メートル高い。モンブランは富士山より、ユングフラウは槍・穂高よりそれぞれ 1,000 メートル高い。高ければそれだけ危険も大きい。例えば雷がとても恐いときいた。雷が鳴り出す前に安全な低さまで下りていなければならない。それでピッチを上げることにもなるのだろう。

ともかく 62 歳になって初めてトレーニングのようなことをすることになった。まず週一回は必ず泳ぐ。1,000 メートルをゆっくりとしかし一気に、流せるようになった。ただ水泳は昔からなじんでいるので楽しい。腕立て伏せを週に数度、これは苦行だ。初め 20 回くらいがやっとだったのが、40 回までできるようになった。山へもできるだけ通う。出張先へもリュックを宅急便で送って登ったりした。早朝、山の麓で会った地元の人が、心配そうに「独りですか」と問いかけてきたこともあった。

多分やっていることはすべて年寄りの冷水に違いない。傍らからは滑稽にも見えただろう。励ましてくれるのは愚妻だけである。

■ありがたい山仲間

私の山登りは中年からである。それまではたまに奥多摩や丹沢へ出掛ける程度だったが、30 代後半からアルプスなどへ行くようになった。主に橋本紀徳先生（15 期）をリーダーとする山行に加わる。金綱正巳先生（３期）も近年までしばしばご一緒された。燕岳への雪上の稜線で、吹き飛ばされそうな強風に必死に耐えておられた姿が目に浮かぶ。平野大先生（26 期）はよくスイカを背負ってくる。登山者の鼻面にスイカとはいける。谷川光一先生（28 期）には残雪にすっぽり覆われた白馬、御岳、常念等々、春山へ何度か連れて行ってもらった。腰までくされ雪につかりながら常念、蝶ケ岳を降り終えたときは芯から疲れていたのだろう、浅間温泉につかってからのビールがちっともおいしくない。ところが、一晩寝た翌日、朝風呂を浴びてからのビールはうなる程のおいしさで五臓六腑にしみわたったのである。私は今でもあんなに美味しいビールを味わった事のある者は世界中で私だけ

だと思っている。初冬、槍ヶ岳への途中、谷川先生が足をくじいて登頂をあきらめたとき、私は独りで新雪の藪を漕ぎ槍を越えて向こうみずにそのまま岐阜県側へ下ったことがある。真っ暗な夜道をつたって新穂高温泉にたどり着いたとき、火事場の馬鹿力とはこういうことなのかと判った次第であった。橋本リーダーのもとではこのような無謀な山行きは決して許されない。全員のコンディション、特に弱っている人の状態に留意し、安全に楽しく山を歩く。それでも橋本先生さえ予期しないことも起こる。大雪山のトムラウシから下山中、西山玲子先生（17 期）と連れ立っていたときヒグマに遭遇したことがある。熊の方で相手にしてくれなかったからよかった。これまで橋本先生には南、北、中央のか各アルプス連山や、関東、東北の山々など所々方々おそらく 50 回以上も山行を案内してもらっているだろう。

それでもスイスアルプスには通用しないのかもしれない。ジュネーブの加藤さんからは６月上旬のスイスアルプスは、日本の 3,000 メートル級の早春と同じ状態と考えればよいというファックスが入ってきた。早春とは３月頃のことか。私はまだ３月のアルプスへ入ったことがない。本格的な雪山の経験はないのである。そこへ田崎信幸先生（29 期）からゴールデンウィークの穂高への誘いがかかってきた。穂高なら 5 月だってスイスへの準備にうってつけだろう。テントも食糧もすべて田崎先生が持ってきてくれるという。ガイドとポーターが兼用という有り難い話だ。しかも上高地へのバス乗り継ぎ点まで田崎リーダー運転の乗用車付である。

涸沢にテントを張る。私はテントははじめて。雪の上に寝ることになるのでマットを敷いてもやはり下から冷えてくる。雪はやがて氷になりごつごつするので、地面を水平にならす作業が要ることも分かった。テントは寝心地のいいものではなかったが、ともかくレッキとした山岳会会員である田崎先生のガイドで雪の奥穂高登頂はなし遂げることができた。あとは、夜の宴会をセーブし風邪をひかないようにして出発を待つのみ。

■メンヒ登頂成る？

私が選んだ山は、ベルナー・オーバーラント山群のメンヒ（4,099 メートル）である。ユングフラウ（乙女）とアイガー（鉄人）という有名な両山の間にメンヒ（坊さん）が介在してつっ立っている。なぜそんな名前がついているのか誰も教えてはくれないが、一番登り易いのがメンヒだ。

加藤さんは都合がつかず、代わりにトップクラスのスイス人ガイド、フライ・ウェリイ氏を斡旋してくれた。

６月９日東京を発ち、10 日夜からクライネシャイデックのホテルに泊まり、天気、コンディションによって登頂日を決めることにした。そこはベルナーオーバーラントの山々の真下海抜 2,000 メートルに位置する。

ホテルに着いたとき、周囲は日中観光客で賑わっていたが、やがて最終登山電車が下っ

てしまうとあたりには人影がまったくみられなくなった。ホテルといっても山宿だが、食堂には私一人だ。泊り客は私だけのようだ。ほどなく空が暗くなり雨が落ち雷が鳴り出した。それが間もなく巨大な爆裂音に変わった。それは日本では経験したことのないすさまじい衝撃音であった。轟音にたたきつけられた瞬間、あたりが真っ白になったとでもいおうか、くらくらするようで自分自身衝撃の中に巻き込まれて消えてしまったかのような感さえあった。4,000 メートル級の山々がつくり出す雷音は本当に恐ろしいものであった。

雷雨が下火になった頃、麓のグリンデルワルトのフライ氏から電話がかかってきた。話を交わしている間に、勢いの赴くまま翌朝登山 OK と応えてしまった。

ガイドブックには時差を考慮し少なくとも数日間は現地に滞在せよ、そうでないと体調が整わず登山中事故を起こしがちであると注意書きしてあったのに・・・・・。スイスに到着して翌々日の朝登攀するのは少し無理だった。よく眠れず、携帯の朝食もとる気がしない。やはり時差の影響がのこっている。

ともあれ一番電車に乗る。出勤の労働者たちがあちこちでかけトランプをやっている。午前９時近く終点ユングフラウヨッホ駅（海抜 3,475 メートル）に着く。そこからは完全な雪と氷の世界だ。

帽子とサングラスをつけ、フライ氏が先に立って歩く。速すぎたら声をかけるようにといってくれる。歩幅が違うがしばらくは平原を歩くので、何とかついて行ける。

登りが始まる所へくると、ハーネスを付ける。ハーネスは初めてだが日本で付け方を教わってきた。フライ氏がザイルで結んでくれる。紐につながれたワン公のようなものだ。これで落ちても安心。滑落の他にクレバスをよけることも肝心なそうだ。氷と氷の間は狭くてもツルツル滑って落ちてゆき、もう絶対でられなくなってしまうという。雪の下のクレバスを予知することがガイドの重要な任務であるという。

こちらはそんなことを危惧するどころではなく、ついて行くのが精一杯。やはり速い。アイゼンをはく。12 本歯。日本では 10 本歯までの経験だった。急登になって力を加えてピッケルを雪氷に差し込む。その繰り返し。山は足でなく腕で攀じ登るのである。腕が利かなくなってくる。景色を見る余裕なんてない。フライ氏が振り返って休まなくてよいかときいてきたとき、返事の声がかすれて出ない。こんなことは初めてだ。

その日メンヒにはもう一組、やはりガイドに引率された欧米人の２人。ずっと後ろからくるが次第に追いついてくる。若者だ。

ついに稜線へ出た。天地一望、スイス全山がみえる感じだ。日本では絶対みられない。しかも山男だけが享有できる白皚々の素晴らしい別世界だ。この一瞬のために山登りはあるのだ。頂上は目前、その高低差 50 メートルほどに思えた。

稜線に近づく頃から、フライ氏が、しきりに‘ウェリー、ベリーウェリー’といってあたりを見回していた。くされ雪だという意味だ。後方の組が追いついた。ガイド２人が相談し、これ以上進むことは危険だという。雪の下はアイスバーンになっているのだが、アイスバーンの上の 1 メートルほどの雪全体が雪崩れとなる恐れがあるという。フライ氏が

ここは小メンヒだ、頂上を極めたも同然といってなぐさめてくれる。4,000 メートルまでは登ったに違いなかろうから満足すべきか。メンヒに別れを告げる。

下りは私が先を歩き、フライ氏が紐を持って後ろからついてくる。下りは速い。若者の組をどんどん引き離す。フライ氏が敏捷であるとほめてくれる。

ユングフラウヨッホ駅に着いたとき午後 2 時を少し回っていた。起床してから水と少しばかりチョコレートを口にしただけ、殆ど休みなしの格闘・・・・。でもいささかあっけなくもあった。年寄りの冷や水の本番はかくしてひとまず無事終わったのであった。

（1996 年 8 月「東京弁護士会期成会誌」）